大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

説話講読『宇治拾遺物語』：第三二話・第五七話をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 宗博 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017677

説話講読『宇治拾遺物語』
——第三二話・第五七話をめぐって——

田中宗博

はじめに

説話集の説話について、何が書かれているかではなく、どう書かれているかを問題にしたい。一般に説話の語り手は、語るべき内容の一部始終を知悉した上で、話を提示するものである。ただ、語り手が保持する情報を、どのように順序づけて開示するかは、それぞれの裁量に委ねられる。意識的な語り手は、聴き手・読者の反応を想定しつつ、どの段階で手の内のカードを見せるかに意を用いるはずだ。ここに語りの巧拙が生じるのは見易い道理で、もし話の展開や事態の帰趨が、早々に予見されてしまうなら、一話の興趣は減殺されるだろう。とりわけ、話の末尾に意表を突く展開、いわゆるどんでん返しがある場合は、なおさらのことである。

いわゆるネタバレの弊は、達者な語り手にとって、是非とも回避すべき注意事項であったろう。それは当然、書記言語によって説話を記録しようとする、説話集編者についても言える。この点『宇治拾遺物語』編者などは、十分に意識的な語り手であったようだ。稿者はずっと以前に、第一六話「尼地蔵を見奉る事」を取り上げ、読者の意識を巧みにミスリードしつつ、末尾の奇瑞（＝地蔵という名の童の顔が裂け、地蔵菩薩の尊顔が現れる）をつよく印象づける語りの手法に、注意を喚起したことがある(1)。ただ、この第一六話は、典拠未詳のいわゆる独自説話であるため、どこまでが編者の功かは確言出来ない。だが、説話をどう語るかに腐心した形跡は、『宇治拾遺』の諸処に散見しているように思える。以下、本稿ではテキストに即し、説話がどう書かれているかに注意し、語りの技法といったものを考えてみたい。

一、第三二話――柿の木上の「仏」と対峙する「右大臣」の話

まず『宇治拾遺物語』第三二話について見てみよう。この話は『今昔物語集』巻第二十第三話と同原拠の説話と考えられている。話の概要は、以下の通り。

醍醐天皇の頃、五条天神近辺の実らぬ柿の木に仏が現われ、京中の人々が群参することがあった。時の「右大臣」はこれを疑い、末世に真の仏が出現するはずはないと、現地に出掛けて試みることを決断。柿の木の仏と対峙し「一時」ばかり凝視した結果、視線に耐えかねたか「糞鳶」の正体を顕して墜落、童部たちに打ち殺された。時の人々は「大臣」を「いみじくかしこき人」と讃歎したという。

この「右大臣」について、『今昔』は「光ノ大臣ト云フ人」（＝源光）と実名を掲げるが(2)、両書の共通母体となった資料が、この人名を持っていたかどうかは不明である。形式論理的に言うと、「光ノ大臣」とあったものを、『宇治拾遺』が敢えて削除する理由はないように思える。なお『今昔』所載話は『宇治拾遺』の倍くらいの字数があり、他にも敷衍的な記述が散見する。

ここで両書を比較するに当たって、まず注意したいのは、洛中のマスヒステリア的信仰状況に不審を抱く大臣の思いが、心内語表現を以て記されている箇所である。

〔宇治拾遺〕まことの仏の、世の末に出で給ふべきにあらず。我行きて試みん。

〔今昔〕実ノ仏ノ此ク俄ニ木ノ末ニ可出給キ様無シ。此ハ天狗ナドノ所為ニコソ有メレ。外術ハ七日ニハ不過ズ。今日、我行テ見ム。

（傍線稿者、以下同）

『今昔』は、この時点で早々に「天狗ナドノ所為」「外術」という表現を用いている。しかも、現地に赴く以前にこのように判断した「光ノ大臣」については、これ以前に「深草ノ天皇ノ御子也。身ノ才賢ク、智明カ也ケル人」と、『宇治拾遺』にはない記述を費やしている。

注意深い読者にとって、このような情報の開示は、結末を予想する恰好の手掛かりとなるだろう。そもそも『今昔』の場合、「天狗現仏坐木末語第三」との標題を有するわけで、既に目録・標題の段階で、天狗偽仏譚であることが明示されてもいた。このようなテキストのあり方は、『今昔』の巻編成・説話配列の問題とも関わるだろう。周知のように、本朝仏法篇末尾に当たる巻第二十は、第一話から第一四話まで連続して、天狗や人を化かす異類（野猪・狐）の説話を類纂している。この構成の中で「天狗」は、「仏

法に敵対する魔物で、ほとんど仏法側に撃退され」ることで「逆に仏法の威力や権威を高める意味を」持たされているともいう(3)。ならば編者にとって、柿の木に現じた仏が、智ある賢臣＝源光によって「天狗ナドノ所為」と、早々に看破されることは、編者の意に適った話の展開であるように思える。

説話を一つ一つの〈個〉として提示するのではなく、巻編成や説話配列（二話一類方式等）で以て〈群〉として処理しようとする『今昔』は、ネタバレにもなりかねない情報の提示を厭わない。心内語表現中の「外術ハ七日ニハ不過ズ」についても、源光が現地に赴いたのが何日目であったかは措くとして、天狗偽仏の敗北を確約する表現としてある。これに対して、構成がゆるやかで〈雑纂形式〉などとも称される『宇治拾遺』は、〈個〉としての説話のテキストの中で、先の見えない展開を読者に提示し続ける。標題についても「柿木ニ仏現ズル事」とあるのみで、天狗の関与を示唆するものはない。また、賢臣＝光ならぬ「右大臣」には、「天狗ナドノ所為」との予見もなければ、「外術」の有効期限が「七日ニハ不過ズ」との認識もない(4)。そのため、仏出現後「五六日」の段階で、現地に赴く「右大臣」の行動は、自ずと先の見えない不安と緊張感に包まれることとなる。

「右大臣」は、柿の木の上の仏を「目もたたかず、あからめもせずしてまもりて、一時ばかり」対峙したという。『今昔』テキストの文脈では、天狗の所為であることを確信する「光ノ大臣」が、「外術」を圧伏する一過程と読めるが、『宇治拾遺』は違う。何者とも得体の知れない異界の存在と視線を戦わせる真剣勝負は、時に敗北した人間を狂気や死に追いやる。それは口頭伝承に遺る化け物話の類型にも明らかだし、『平家物語』「物怪沙汰」の逸話も、あの剛胆な清盛であるからこそ、「目競」(5)に勝ち得たのだと、逆説的に語っていたのではなかったか。

もし、柿の木の仏が強力な邪神の化現であるなら、「右大臣」は即座に蹴殺されるかも知れない。たとえ天狗の仕業であったとしても、『宇治拾遺』一六九話の「美濃国伊吹山に久しく行ひける聖」のように、まんまと真の仏と信じ込まされ、狂気の果てに死を迎えたかも知れない。少なくとも『宇治拾遺』の語り、情報の開示の次第は、読者にそう読むことを示唆する。概して『今昔』のテキストを知悉する我々は、『宇治拾遺』の構築する文脈を、丁寧に読んでこなかったのではないか(6)。史上実在の「光ノ大臣」ならぬ無記名の「右大臣」は、仏と化現した何者かを相手に、勝敗の定まらない決戦を挑むのである。明らかに『宇治拾遺』説話の叙述は、先の見えない展開へと読者の好奇心を喚起し、手に汗を握りながら事態の推移を見守ることを求めている。そのことは、

柿の木に現じた仏への待遇表現、敬語の使い方においても言えそうだ。

〔宇治拾遺〕この仏、しばしこそ花も降らせ、光をも放ち給ひけれ、あまりにあまりにまもられて、しわびて、大きなる糞鳶の羽折れたる…

〔今昔〕此仏暫クコソ光ヲ放チ花ヲ降シナド有ケレ、強ニ守ル時ニ、佗テ、忽ニ大キナル屎鵄ノ翼折タルニ成テ…

これ以前、『今昔』は冒頭部で「俄ニ仏現ハレ給フ」「花ナドヲ令降メ」と記し、「光ノ大臣」の現地到着時にもなお「実ニ木ノ末ニ仏在マス」「見ニ、実ニ貴キ事無限シ」などと、敬意を込めた表現を採っていた。それが右に見るように、「光ノ大臣」の凝視に晒された段階で、既に正体は看破され勝敗は明らかだ――とばかりに解除されてしまう。これに対し『宇治拾遺』は、「右大臣」の眼差しに晒され、今まさに正体を現そうとしている何者かが「しわびて」敗北の瞬間を迎えようとする、その最後のぎりぎりまで、敬語の使用を止めようとはしない。

微細な異同と言えばそれまでだが、やはり『今昔』はここでも軽くネタバレを犯している。一方『宇治拾遺』の語り手は、「右大臣」と柿の木上の「仏」との対峙を、最後の瞬間まで結末の見えない、勝つか負けるかの真剣勝負として描こうとする。かかる緊張感に富む話の展開によって、読者の関心を巧みに繋ぎ止めた上で、敗れた「仏」は「糞鵄」の卑小な姿を現し「童」に打ち殺されたと、結末のカタルシスに繋ぐあたり、『宇治拾遺』の語りには非凡なものがある。

とは言え、この説話もまた伝承上にあったもので、『今昔』所載話との行文上の先後関係についても確言は出来ない。多くの研究者が考えるだろうように、本話もまた散佚『宇治大納言物語』を典拠とする可能性はある。もし、そうだとすると、『今昔』のものと『宇治拾遺』のものの、どちらが説話の古態を伝えるのかが問題となるだろう。もとより、論拠ある新見が提示できるわけではないが、以上で試みた比較の結果からも、『今昔』の方が後代の『宇治拾遺』のものよりも、手が加わったものとするのが穏当な気がする。

実際、「延喜の御門」時代の「右大臣」に固有名詞を宛て、「天皇ノ御子」にして「身ノ才賢ク、智明カ也ケル」と讃仰される賢臣＝源光によって、天狗が一蹴されたと語るのは、『今昔』の表現意図に適うものがあった。小なりとはいえ『今昔』説話の行文は、明らかに仏法王法相依の枠組で構想されているのだ。仏法に仇をなす天狗が、王法側の理想的な賢臣の力で排除され、王都の秩序は回復する。そう語ることを志向する『今昔』の叙述におい

て、天狗の敗北が早々に予告され、結末が予定調和的に流れるのも、自ずからなる仕儀であったと言えようか。

一方『宇治拾遺』の行文については、単に散佚『宇治大納言物語』の如き原拠を、忠実に書承しただけではないのかとの疑いも残る。そうなのかも知れないが、本話が『古本説話集』とか『世継物語』の類に同話をみない以上、これ以上詮索を進める材料はない。確実に言えることは、『今昔』の同話との比較によっても、『宇治拾遺』の叙述の背後には、情報の提示に意識的な語り手の存在を、確実に感知できるという事実である。

二、第五七話――石橋の下の「蛇」が女を追う話

(1)

前節でみた事例に限らず、概して『宇治拾遺物語』所載話には、容易に話の結末が予見されないよう配慮された形跡が窺える。巧みに読者の関心を制御しつつ、話の末尾に印象的なクライマックスを構えることは、『宇治拾遺』編者のお手のものだったようだ。そのことは、『宇治拾遺』に特徴的な笑話の類、一話の末尾に配された興言利口で哄笑が喚起される説話などにも指摘出来よう。それらについては先行研究(7)に譲るとして、以下本稿では、まずは因果応報の現報説話と呼べそうな、第五七話「石橋の下の蛇の事」を採り上げて、もう少しこの問題を掘り下げたい。

『宇治拾遺』の標題は、ここでも禁欲・自制的で、話の内容や結末について殆ど何も語らないに等しい。参考までに『増補改訂日本説話文学索引』(8)で引くと、本話は「蛇（大蛇・毒蛇・虵）」の項に「人を恨みて蛇となりし女、雲林院の菩提講を聞きて人に生る」と、極少の字数で要約されている。確かに、一話の顛末はその通りだが、これではあまりに簡潔に過ぎるので、もう少し言葉を補って話の概要（何が起こったか）を示してみよう。

ある女が雲林院の菩提講に向かう途中、西院の辺りで石橋を踏み返して過ぎ去った。女は気付かなかったが、石橋の下には、人を恨むあまり蛇に転生する報いを受けた女がいたのだが、これを機に橋の下からの解放を得た。女に報恩しようとした蛇は、そのまま雲林院にたどり着き、共に菩提講を聴聞する。仏縁を得た蛇は、罪を滅して人に転生することとなり、さきの女に「良縁を与えることで恩に報いたい」と夢でと告げる。実際に女は、大臣家の裕福な下家司の妻となることを得たという。

これで多少とも話の始終、何が起きたかは明瞭になる。能説の説法師なら、右の梗概だけを示されても、適宜敷衍具体化して、一座の説法に供することも出来たかも知れない。しかし、『宇治拾遺』

の話を一読すると、この梗概が何ほどのことも伝えていないことに即座に気付くはずだ。いかに説話が、拡縮自在に話を伝え得る媒介（メディア）だとしても、本話の場合、右の要約に示した話の概要が、具体的にどう語られているかを問題にしなければ、一話を読んだことにはならないだろう。

（2）

『宇治拾遺物語』は、この現報譚を語るに当たって、話中の出来事をつぶさに見聞する女性を登場させている。いわゆる〈視点人物〉を通した語りが採用されるわけだが、このもう一人の女は、能でいうワキの役割さえ超えて、一話の中でほとんど主役に近い存在ともなっている。冒頭「この近くの事なるべし。女ありけり」と紹介されるのは、この目撃者の女のことであり、石橋を踏み返して現報を得た女のことではない。一話の叙述は、この女が目で見、耳で聞き、心で思ったことを、時系列に沿って語る体裁で展開する。

前を行く女が、件の石橋を踏み返す場面はこう語られる。

石橋をふみ返して過ぎぬる跡に、踏み返されたる橋の下に、斑なる蛇の、きりきりとしてゐたれば、石の下に蛇のありけるといふ程に、この踏み返したる女の尻に立ちて、ゆらゆらとこの蛇の行けば、尻なる女の見るにあやしくて、「いかに思ひて行くにかあらん、踏み出されたるを悪しと思ひて、それが報答せんと思ふにや、これがせんやう見ん」とて、尻に立ちて行くに

もとより説話の語り手は、この蛇が何者でどんな目的から前の女を尾行するのか、知悉している。よって、この段階で「実は、この踏み出された蛇というのは…」云々と、説明してしまうことも、可能性としてはあり得たはずだ。しかし、ここで視点人物となる女を設定することで、その情報の開示をずっと先延ばしにすることが、無理なく可能になる。実際、目撃者の女が事の真相を知るのは、もっと話が進行してからのことだからだ。しかし、それだけではない。右引用に見るように、女は心中「蛇が仕返しをするのではないか。それなら見届けよう」と思ったなどと、心内語表現で明記されている。ここに、苦境を脱した女＝蛇の報恩の意志は伏せられ、一話は暗く隠微な雰囲気をまとうこととなる。

復讐の害意を抱く蛇と、何も知らない女との組み合わせは、当然不吉な破局を想起させる。化け物退治譚に傾斜した人蛇通婚譚は枚挙に遑がないし、もっと神性の剥落した、蛇が女を犯して死に至らしめる話も、はやく『日本霊異記』が記録に留めている（中巻第四十一縁／『今昔』24－9も書承）。さらに女陰を狙った蛇が、

女を蕩かしたという世俗化した話も『今昔』に採録されている（巻第二九第三十九話）。女を追う蛇という構図は、自ずとこれら禍々しい話柄への連想を呼ぶはずだ。読者は、自らの保持する既存の話の記憶を参照しつつ、一話の展開を追うこととなるが、それは視点人物の女の心内語（＝蛇の「報答」を「見ん」）に挑発され、方向付けられるのである。

このように、蛇の報恩の意志を十分に知りつつ、それを隠蔽しておこうとする語り手は、読者の野卑な性的関心すら掻き立てて、話の展開への関心を繋ごうとする。微細な表現に拘るなら「女の尻に立ちて、ゆらゆらとこの蛇の行けば」といった記述にも、蛇と女の姦淫を示唆する意図が感じられよう。明らかに語り手は、読者の心意をミスリードしつつ、結末の意想外の展開へと関心を繋ごうと企んでいるようだ。

（3）

一話の展開は、この後も、様々な説話と共有されるモティーフを鏤めながら語られていく。まず尾行する視点人物の女の目に映じたのは、先の女が「我が供に蛇のあるとも知らぬげ」な様子であり、「蛇の女に具して行くを見つけいふ人もなし」という状況であった。幽霊であれ妖怪であれ、怪異を惹き起こす異界の存在が、それと抜きがたく関わることになる人物の目にしか見えないというのは、古今東西の怪談類に頻出する話の型でもある。ここでは差し当たって、「南井坊総六丸」を震撼させたという(9)、『今昔』巻第二十七第二十一話を参照しておこう。

周知のように該話は〈己が命の早使い〉(10)型の怪異譚だが、美濃国へ下向する「紀遠助」は、「勢田ノ橋」で怪女に届け物を言付かるが、その会話の一部始終は「遠助ガ共ナル従者共ハ、女有トモ不見ズ、只、我ガ主ハ馬ヨリ下テ、由無ク立テルヲ、ト見テ、怪シビ思ケル」と記される。この遠助が結局、本人の過失ではなく妻の過失がもとで、命を奪われたことを考慮すると、ただ一人見えてしまった女が、既に否応なく怪異に巻き込まれていることは明らかだ。――不吉な蛇の尾行をただ一人知りながら、それを告げようとしない女は、蛇の侵害から安全であり得るのか。この点においても、先の見えない展開に読者の関心を繋ごうとする語り手の意志は、貫徹されているように思える。

次いで話の舞台は、雲林院菩提講の場に移る。女を追う蛇も「寺の板敷」に上り、「傍らにわだかまり伏し」たが、やはり「これを見つけ騒ぐ人」はなかったという。「希有のわざかな」と思いつつ、蛇の動向を「目を放たず見る」視点人物の思いは、当然読者にもそのまま共有される。蛇は何をたくらみ、どうしようとい

うのか、それは何時のことか。しかし、蛇が行動に出る瞬間を待つ緊張感は、「講果てぬれば」の一文で敢えなく頓挫する。――何も起こらなかった、やはり寺院内の仏事の場では、執念深い蛇であっても手出しは出来ないのか。そんな読者の反応を見越したかのように、「女立ち出るに随ひて蛇もつきて出でぬ」と危機的状況は継続し、結末は後段へと持ち越されていく。

このように、叙述に緊張と緩和を適宜織り交ぜ、結末へと関心を繋ぐ語りの技法は、かなり手馴れたものと評価出来よう。以下、話の続きが知りたいと感じる読者の興望を担うかのように、視点人物の女の追跡は次第に熱を帯びる。雲林院での聴聞を終え、京中に戻る女を追う蛇は、前の女と共にある家に入り込む。それを見た視点人物の女は「昼はするかたもなきなめり。夜こそとかくする事もあらんずらめ。これが夜の有様を見ばや」と、蛇が女に夜することに心惹かれるまま、野次馬根性剥き出しで行動する。

結局、女は京上りの田舎人などと虚言を弄し、その家に入り込む事に成功するが、右の心内語の内容は、そのまま読者に共有される仕組みとなる。――なるほど、蛇は女に夜になってから何かをしようと企んでいるのか。当然ここで読者は、蛇による女性への性的陵辱を意識するはずだ。その「夜の有様をみばや」とは、何とも陋劣な好奇心を挑発する一文にも思えるが、これがきっちりと言語化されることによって、読者の関心もこの方向へ確実にミスリードされることとなる。

（4）

夜が来ても、蛇ははじめの女の傍らを離れない。それが見えるのは、視点人物の女だけだ。「今や寄らんずらん」と見守る女は、「この事もやがて告げばや」と自省もするが、「我がためも悪しくもやあらん」などと傍観者の利己主義を発動し、ただ事態の推移を待つ。読者も当然、この視点人物の女に自己を重ね合わせ、手に汗を握り破局を待つことになる。しかし、ここでも何も起きないまま「遂に見ゆる方もなき程に火消えぬれば、この女も寝ぬ」と、舞台は強制的にブラックアウトとなる。

夜が明けて、視点人物の女は「いかがあらんと思ひて、惑ひ起き」た。夜は異界の存在が跋扈する時間である。女は蛇にどんな目にあわされたのか――その惨状を目撃するかも知れない緊張の極で、女の目に映じたのは件の女の「ともかくもなげ」な様子であった。これまでの叙述を通して、時に陋劣な性的関心をも掻き立てられてきた読者は、決定的な肩すかしを喰らう。話の展開の中で緊張と緩和の妙を、巧みに操ってみせる語りの手腕は、やはり端倪すべからざるものだ。

視点人物の女は朝の光の中で、件の女が家主の女に始めた〈夢語り〉を立ち聞きする。語り手は、その言葉の引用・掲出によって、ようやく事の真相――蛇は何故女を追い続けたのかについて、読者に情報を開示し始める。その仔細は、蛇身を享けた女の〈懺悔物語〉を聞いた女の〈夢語り〉という形で、言説の引用の引用という容れ子構造をとる。夢枕に立ったのは「腰より上は人にて、下は蛇なる女」であった。この姿は、仏縁に遇って蛇道を脱しつつある女に相応しい形象と言える。この真反対にあるのが、恋の妄執によって蛇道に堕ちようとする女を、上半身蛇・下半身人間で描き出した『道成寺縁起』のもの[11]と言えば、その含意は明らかとなろう。『宇治拾遺』の異形の女は、「おのれは人を恨めしと思ひし程に、かく蛇の身を受け」たと懺悔する。この告白は、不必要な情報を捨象した簡潔なもので、語り手は女の前世にあったであろう妬婦の物語に寄り道して、物語を拡散することなく結末を急ぐ。

続けて蛇身の女は、石橋からの解放を喜び、謝恩の思いから跡を追ったと告げる。そして、はからずも雲林院菩提講に同席し「あひがたき法をうけたまはりたるによりて、多く罪をさへ滅し」人への転生が近くなったと言う。さらに「この報ひには、物よくあらせ奉りて、よき男などあはせ奉るべきなり」と、具体的に利益を約束するのであった。いわゆる庶民クラスの女に神仏が霊験を授ける際、良縁を与えることを約す事例がまま見られることは、『今昔物語集』本朝部の観音霊験説話[12]（貧女救済譚）等で知られる。ただ、蛇道の悪報を享け、石橋の下に呻吟していた女が、なぜ縁授けのような霊験を発揮できるのかは、一話中での了解・説明が難しい。敢えて推論するなら、同じく人面蛇身の姿で形象される「宇賀神」が、弁財天と習合しつつ福神信仰の対象となったことなどが、関係しているのかも知れない。

それは措くとして、女の〈夢語り〉の聴取という形で、今まで伏せられてきた蛇の行動について、十全な謎解きがなされるに至る。ただしこの時点で、夢告の持つ意味の重さが理解出来るのは、夢告を受けた当の女ではない。それを知るのは、「報答せんと思ふにや、これがせんやう見ん」と、怖いもの見たさのエゴイスティックな欲求から、虚言を弄してまで蛇の行為を見届けようとした女の方である。そして読者もまた、視点人物を設定した語りに誘導され、多少なりとも下世話で陋劣な関心を掻き立てられつつ、蛇が女に何をするかを注視して（させられて）きたはずだ。異形の女の夢中の言葉は、当の夢見た女には心当たりのない意味不明のものであっても、視点人物の女と我々読者には、ここまで隠されてきた情報の開示・謎解きとなる。

語り手はこの一話の終結部まで、周到にネタバレを回避してきた。結局本話は、執念深い蛇の邪悪な振る舞いを描くものではなく、偶然の出会いが仏縁・救済に繋がることを語る、現報霊験説話だったというのだ。語り手の巧みな話法に引きずられ、蛇による女性侵害の一段を待望する（？）心意を抱いた読者は、邪な関心の持ち方を恥じねばならないが、何より後ろ暗い思いをするのは視点人物の女であろう。「まことには、おのれは田舎より上りたるにも侍らず」との告白に始まり、女は堰を切ったようにして昨日来の見聞を語り始める。

その言葉の中には「告げ奉りては我がためも悪しき事にてもやあらんずらんと恐ろしくて」などといった自己弁護の詭弁も含むが、夢告を受けた女にとっては、夢の意味を説き明かす〈夢解き〉として、その告白は重い意味を持つ。いかに〈夢信仰〉が厚い時勢にあっても、夢の有意性が了解されるには、本人以外の第三者の証言が要請されることは、往生伝の類にも明らかだ。ここに、第三者の立場から野次馬的な尾行を続けた女も、神秘的な蛇（に転生した女）の報恩霊験譚に、無理なく組み込まれるに至る。

真相を語り終えた女は「今よりはこれをついでに何事も申さん」と話を結ぶ。それを承けて語り手は「後は常に行き通ひつつ、知る人になんなりにける」と簡潔に後日譚めいた情報を付記する。視点人物の女にまで、霊験が届いたかどうかは不明だが、一方的な見る・見られる関係にあった二人の女の間に、一種の結縁関係が成立したことは疑えない。これも一種のメデタシメデタシと言えようか。

（5）

以上、本話はかなりよく出来た説話だと言えそうだが、それは如上で試みた——何が語られているかではなく、どう語られているかを意識化した分析によって、明らかになる性質のものであった。それでは、このような語り口を備えた説話は、どのような場で生成し、『宇治拾遺物語』のもとに届いたのか。もとより実証的論拠となる徴証はないが、話中に手掛かりが求められないではない。それは、二人の女が共に目指したという「雲林院」の「菩提講」である。仮構された『大鏡』の談話の場が、雲林院菩提講に設定されたように、それは大宅世継とか夏山繁樹クラスの、京中衆庶が集まる法筵としてあった。本話についても、女たち（と蛇）は「寺の板敷に上りて」「講果て」るまで、参列・聴聞が可能であったと語られている。

このように、貴賤衆庶に開かれた場で、実際に説法・唱導活動に従事する僧徒は、眼前に人々の反応を見ながら、その任を果た

さねばならない。――退屈で難しい話をすれば、欠伸をされる。余談が長ければ話が拡散し、人々の感動が薄い。それら聴聞側の人々のあからさまな反応に鍛えられ、人々の関心を話の展開に集中させることに長けた語り手が、本話の背後に透けてみえるような気もする。

付言すると、本話の登場人物はすべて無名の女性たちである。雲林院へ出向いた二人はもとより、視点人物の女が虚言を構えて宿泊を頼み込んだ家主も「老いたる女」であった。そこには、「行き泊るべき所も候はぬ」女を快く宿らせる善意と、返礼に「麻やある、績みて奉らん」と自らの技能を提供する女との、双方向的な扶助協力の様子が垣間見える。本話の後景を成すのは、そのような女たちの排他的ではない、親和的な関係性であった。

そんな女たちの世界に通じた人物に対して、本話のような説話は十分なリアリティを発揮し得たはずだ。想像するに、この間の事情に明るい僧徒の手によって、話中の女たちのような階層の人々が聴くことも意識して、構想されたのが本話であったと考えたい。想像に想像を重ねると、菩提講の行事が一段落した後、おもむろに能説の僧が「皆様、今日はよくぞ御聴聞にいらっしゃいました。何事も仏縁というもの…実は皆様と同じように、この寺に参詣なさろうとした方に、こんなことがあったと聞いております」などと語り始めた場面を空想する。もちろん、その際には聴衆を見回して、彼らが身近に感じられるような話のディテールを適宜採り込みながら。

（6）

論拠薄弱な空論・贅言は慎むとして、『宇治拾遺物語』の独自説話である本話が、相当よく考えられた語り口のものであることは、仔細に見てきた通りである。それが、才ある編者の一回的な著述行為の結果なのか、原話の成立基盤に関わるものなのかは、容易に判定し難い。ただ、『今昔物語集』のように体系的に説話を構築し、その構造の中で説話を意義付け提示していく類の説話集と、『宇治拾遺』とでは、説話の扱い方に自ずと差が出てくることは間違いないだろう。

既に先行研究が積み重ねられている通り、『宇治拾遺』の説話配列には、時に明白に時に隠微な形で、連想の糸が指摘できるという[13]。しかし、主題を決めた巻編成や、明示的な説話類集を行わない以上、『宇治拾遺』においては、次々と繰り出される説話を予断なしに、変化・変転の相において読むことが求められてもいる。その意想外な説話配列の妙味と共に、説話一つ一つの中においても、容易に結末を見通せない工夫が凝らされていること

に、注意を向ける必要があるだろう。その工夫は、容易にネタバレしないよう配慮された、標題の選択にも及ぶかも知れないのである。やはり『宇治拾遺』のような説話集を読む際には、何が語られているかだけでなく、どう語られているかについても、各説話ごとに考えを深めていく必要があると痛感する。やはり『宇治拾遺』は、文学として読むに値する説話集の古典なのだ。

注

※本稿で引用したテキストは、以下の諸書に依っている。

・『今昔物語集』――小峯和明校注『今昔物語集 四』（岩波新日本古典文学大系／一九九四年）。

・『宇治拾遺物語』――小林保治・増古和子校注・訳『宇治拾遺物語』（小学館新編日本古典文学全集／一九九六年）。

（1）田中宗博「地蔵に遇った尼のこと――『宇治拾遺物語』第16話をめぐって――」（「人文学論集」第9・10集 大阪府立大学人文学会／一九九一年三月）。

（2）源光――（八四六～九一三）仁明天皇皇子。醍醐天皇治世の昌泰四年（九〇一）、菅原道真左遷の後任で右大臣（極官）。

（3）前掲『今昔物語集 四』二一八頁「天狗譚から在俗の菩薩道譚へ――仏法篇の終章」参照。

（4）『宇治拾遺』本文には、柿の木の仏が出現して「五六日」とあるが、『今昔』にはない。一方で『今昔』では、源光が「外術」の有効期限について「七日ニハ不過ズ」などと認識していたとある。これは、『宇治拾遺』のように「五六日」とある原拠本文をみて、『今昔』編者が操作し作文した結果ではないか。この点からも『今昔』本文は、源光の勝利＝天狗圧伏が、予め告示されているように思えてならない。

（5）平清盛の、福原における物怪圧伏の段を「目競」などと称するのは、後代の鳥山石燕『今昔 百鬼拾遺』（安永十年＝一七八一年）からである。ここは、便宜的に呼称を借用した。

（6）一例を挙げると、前掲『宇治拾遺物語』（小学館）頭注が、「右大臣は、「外道の術は七日以上はもたない」との言い伝えを思い出し、実否を確かめに赴き」等と記すのは、『今昔』所載話との混同であり、『宇治拾遺』説話理解としては明らかに失考。

（7）評価の定まった早い時期の論考として、田口和夫「中世的人間像――宇治拾遺物語「狂惑の法師」の解釈から――」（『説話』1／一九六八年六月）・中野猛「〝鮭の一二尺なきやうは〟について――宇治拾遺物語の中世的性格――」（「言語と文芸」76／一九七三年五月」などがある。

（8）『増補改訂日本説話文学索引』境田四郎・和田克司 編（清文堂・縮刷版／一九七六年）より引用。

（9）周知のように、鈴鹿本綴じ代部分の書き込みに「此一条ハ尤コワキ事也可有覚悟」とあることを指す。

（10）柳田國男「己が命の早使ひ」（筑摩書房『柳田國男全集20／一九九九年）。

（11）道成寺蔵『道成寺縁起』上巻末尾近く、僧を追う女が完全に蛇と変身する直前、下半身は人間の女性でありながら、「襟元からは、にょっきりと鱗の生えた蛇の生首がのぞいている」姿が描かれている。小松茂美編集解説「続日本の絵巻24」「桑実寺縁起・道成寺縁起」（中央公論社／一九九二年）83頁参照。

（12）『今昔物語集』巻第一六第九話・第三十話等。

（13）前掲『宇治拾遺物語』（小学館）解説「三 説話配列の特色」に

研究史のまとめが成されている。

付記：本稿のうち、第五七話に関わる部分の論旨については、大阪府立大学人間社会学部言語文化学科（日本言語文化コース）の二〇一八年度卒業生である則皮泰良くんの卒業論文「『宇治拾遺物語』第五十七話「石橋の下の蛇の事」の考察」と重なるものがある。本稿の執筆着想の起点は、則皮くんの卒業研究を指導する過程で、二人で考察・討議を重ねた記憶に遡る。文責が田中にあるのは当然だが、則皮くんとの共著に近いことを意識しながら論述を進めた。私事ではあるが、本学定年退職の時期に当たり、学部専門教育に携わった頃の成果の一端を、ここに示すことが出来たのを喜びとしたい

（たなか むねひろ・本学教授）